

普通科と専門学科を併設する知的障害特別支援学校高等部におけるカリキュラム・マネジメントに関する実践研究

—教科等横断的な視点を踏まえた研修の実施とその効果—

○工藤 清和

（弘前大学教育学部附属特別支援学校）

KEY WORDS: カリキュラム・マネジメント, 教科等横断, 単元配列表

1 目的

本研究では、普通科と専門学科を併設する特別支援学校知的障害高等部（以下、併設校）における教科等横断的な視点を踏まえた研修を通して各教科等の単元及び授業の改善を図るための効果的な手立てを検討することを目的とした。

2 方法

（1）研究仮説

単元配列表等の作成と活用や定期的な授業の振り返り等、具体的作業をとおした話し合いや学び合いの継続により、カリキュラム・マネジメントへの積極的関与、教員間の連携・協働の促進、他学科や学年、学級、教科等への理解促進が図られると考えた。

（2）対象及び研修概要、検証方法

前任校の教員を対象に、下記の①～⑤の内容に関する校内研修等を実施した。①国立特別支援教育総合研究所(2017)の「カリキュラム・マネジメント促進フレームワーク」を参考とした具体的方策の検討、②新学習指導要領に関する研修会の計画と実施（input）、③単元配列表の作成と活用（output）、④「特別の教科 道徳」「自立活動」学習会の計画と実施（input）、⑤「授業を考える日」（30 分程度の短時間で授業研究を行う日）の実施と振り返り（output）。

③では、単元配列表を学科・コースを越えて見比べ、生徒自身が知識を相互に関連付けてより深く理解する「深い学び」を実現させるために、教職員間でどのように各教科等の関連付けを図っていくかについて話し合った。KPT 法を活用し、継続すること（Keep）、改善が必要だと思うこと（Problem）、新たに取組むこと（Try）に整理した。

仮説検証のために、上記①～⑤について「必要と感じていること」「今できていると感じていること」の観点から、一連の研修前後の 5 月と 12 月に質問紙調査を行った。指導内容等の系統性、教員間の連携・協働、授業に関する指導技術等、資質・能力の育成の 4 カテゴリー14 項目について、6 件法で回答を求める形式とした。なお、本研究において対象とした教員に対しては、個人情報やデータの取扱い等について十分に説明を行い、倫理的に配慮した上で実施したものである。

3 結果と考察

回答を点数化し、研修前後のデータについて対応のある t 検定を実施した。有意水準は 5 %未満とした。結果を表 1、表 2 に示す。

（1）「必要と感じていること」の意識調査の比較

「必要と感じていること」の意識調査の比較では、指導内容等の系統性や教員間の連携・協働、授業に関する指導技術等、資質・能力の育成の全ての項目で有意な差は見られなかった。しかし、5 月当初から平均値が 3 点台後半から 4 点台後半と高い数値を維持しており、これらが大事なことで、必要なこととして認識されていることが推測された。

（2）「今できていると感じていること」の意識調査の比較

「学年内の各教科等の指導内容につながりや関連をもたせること」「他教科の教員と担当授業を越えて話し合うなど、積極的に関わること」「各学科やコースを越えて他の教員と話し合うなど、積極的に関わること」「具体的な指導内容について検討したり、考えを述べたりすることができること」

「障害の重度・重複化、多様化への対応ができること」「主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業改善が意識できること」「生徒の卒業後の自立（職業的自立、生活的自立）と社会参加につながる実践ができること」「生徒が授業で学んだことを生活の中で活用できる力を育てること」「生徒が自他を認め、卒業後に生きがいや働きがいをもって生活する力を育てること」の項目で有意な差が認められた。

表 1 研修前後の「必要と感じていること」の意識調査の比較

項目	n	5月		12月		t値
		平均値	SD	平均値	SD	
指導内容等の系統性						
① 年間をとおした指導内容の見直しをもたせること	61	4.28	0.75	4.41	0.73	1.03
② 学年間の指導内容について系統性をもたせること	61	4.16	0.75	4.31	0.67	1.42
③ 学年内の各教科等の指導内容についてつながりや関連をもたせること	61	4.10	0.74	4.20	0.72	0.83
④ 中学校特別支援学級や特別支援学校中等部の指導内容との連続性をもたせること	61	3.79	0.91	3.80	0.94	0.13
⑤ 他の学科やコースの特色や独自性、相互の連続性を理解していること	61	3.77	0.78	3.97	0.92	1.72
教員間の連携・協働						
⑥ 他教科の教員と担当授業を越えて話し合うなど、積極的に関わること	61	4.13	0.80	4.31	0.71	1.84
⑦ (行事を含む)授業等について担当教員間で連携したり、協議したりして、組織的に取り組むこと	61	4.54	0.56	4.61	0.49	0.94
⑧ 各学科やコースを越えて他の教員と話し合うなど、積極的に関わること	61	4.23	0.82	4.18	0.80	0.57
授業に関する指導技術等						
⑨ 具体的な指導内容について検討したり、考えを述べたりすることができること	61	4.41	0.61	4.54	0.56	1.59
⑩ 障害の重度・重複化、多様化への対応ができること	61	4.54	0.53	4.64	0.51	1.23
⑪ 主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業改善が意識できること	61	4.34	0.57	4.46	0.69	1.22
資質・能力の育成						
⑫ 生徒の卒業後の自立(職業的自立、生活的自立)と社会参加につながる実践ができること	61	4.66	0.51	4.74	0.51	1.00
⑬ 生徒が授業で学んだことを生活の中で活用できる力を育てること	61	4.69	0.50	4.74	0.51	0.62
⑭ 生徒が自他を認め、卒業後に生きがいや働きがいをもって生活する力を育てること	61	4.62	0.61	4.67	0.56	0.50

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表 2 研修前後の「今できていると感じていること」の意識調査の比較

項目	n	5月		12月		t値
		平均値	SD	平均値	SD	
指導内容等の系統性						
① 年間をとおした指導内容の見直しをもたせること	61	2.69	1.14	2.85	1.11	1.52
② 学年間の指導内容について系統性をもたせること	61	2.57	1.15	2.70	1.08	0.90
③ 学年内の各教科等の指導内容につながりや関連をもたせること	61	2.56	0.97	2.93	1.07	2.89 **
④ 中学校特別支援学級や特別支援学校中等部の指導内容との連続性をもたせること	61	1.92	0.91	2.05	1.15	0.80
⑤ 他の学科やコースの特色や独自性、相互の連続性を理解していること	61	2.25	1.14	2.46	1.11	1.54
教員間の連携・協働						
⑥ 他教科の教員と担当授業を越えて話し合うなど、積極的に関わること	61	2.95	1.25	3.31	1.09	2.38 *
⑦ (行事を含む)授業等について担当教員間で連携したり、協議したりして、組織的に取り組むこと	61	3.44	1.05	3.64	0.96	1.33
⑧ 各学科やコースを越えて他の教員と話し合うなど、積極的に関わること	61	2.89	1.26	3.33	1.17	2.97 **
授業に関する指導技術等						
⑨ 具体的な指導内容について検討したり、考えを述べたりすることができること	61	2.82	1.09	3.10	1.16	2.01 *
⑩ 障害の重度・重複化、多様化への対応ができること	61	2.49	1.11	2.89	1.06	2.92 ***
⑪ 主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業改善が意識できること	61	2.39	1.03	2.84	1.07	3.90 ***
資質・能力の育成						
⑫ 生徒の卒業後の自立(職業的自立、生活的自立)と社会参加につながる実践ができること	61	2.93	0.94	3.28	1.20	2.69 **
⑬ 生徒が授業で学んだことを生活の中で活用できる力を育てること	61	2.87	0.90	3.25	1.03	3.28 **
⑭ 生徒が自他を認め、卒業後に生きがいや働きがいをもって生活する力を育てること	61	2.56	1.05	3.11	0.98	4.32 ***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

4 成果と今後の課題

研修会等での知識のインプットと、校内研究での話し合いや「授業を考える日」での授業実践や振り返り等のアウトプットを組み合わせることにより、教員が主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業改善や、生徒が自他を認め、卒業後に生きがいや働きがいをもって生活する力を育てること等の実践力を高めることにつながったと捉えられた。連携・協働、組織的取組については、今後、学科・コースを越えた話し合いや対話を重ねることで、促進される可能性があると考えられた。

課題としては、教員の研修への負担感の軽減が挙げられた。校内研究の話し合いを月 1 回にしたり、「授業を考える日」の振り返りを 30 分にしたりして、コンパクト化に努めたが、質問紙調査では、負担軽減を求める意見がいくつか見られた。「意欲的に参加できて、充実感が湧く研修」を求める意見もあり、校内研修の目的や意義をより丁寧に説明しながら、教員が主体的に研修に取り組むことができるよう、さらに研修方法の工夫に努めていくことが必要であると考えた。

(KUDO Kiyokazu, KIKUCHI Kazufumi)